

## 中の宮牛蒡

福井 功

練馬区の西武池袋線豊島園駅から、成増方面行の西武バスに乗ると、三つ目に「中の宮」という、バス停がある。今はほとんど住宅で埋まり、東に農家の「加藤さん」が見えるくらいで、牛蒡畑はもう何十年も前から見られないが、このあたりが「中の宮牛蒡」の生まれ故郷である。

牛蒡など地のなかに深く入る、根菜類の江戸の発祥の地は、今の北区滝野川である。あそこは関東ロームの、作土の深いところで、それで江戸開府とともに、大根、人参、牛蒡などの産地となり、江戸の発達とともに、野菜からその種子の生産に移り、今でも大きな株式会社の種苗店が、何軒かあるという、ところである。

この「滝野川牛蒡」は今でも、全国的に有名であるが、その「滝野川牛蒡」がここ。練馬の中の宮で改良され、やや早生で、肉づきの良い牛蒡となり、「中の宮牛蒡」と呼ばれるようになったのである。

私が中の宮の同じ町内である、春日町に居を定めたのはもう四十年あまり前になるが、そのころでも、春日町には牛蒡はほとんど見られなかったから、盛んに牛蒡が作られたのは、昭和の始め、明治、大正のころのことであろう。付近の農家の古老にたずねても「牛蒡を作ったのは俺の若いとき」というから、やはり昭和の始めであろう。

この牛蒡が、大泉の篤農家「渡辺徳右衛門、正好の親子」によって、さらに改良されて「渡辺早生牛蒡」となり、農林登録もとり、今も種苗カタログに名をのこしている。

滝野川牛蒡は、肉づきが悪く、したがって細く、地に深く入り過ぎるので収穫に（掘り上げ）苦労する。もっとも、練馬では、牛蒡は作った農家は掘らないで、たいてい畑でそのまま「牛蒡屋」に売るので、それに「牛蒡屋」は「掘り子」を別に雇っている。したがって農家は掘り取る苦労はしない。牛蒡の生産、流通は野菜のなかでは、特殊なシステムであったが、この「牛蒡屋」は区内ではいつしか消えてなくなったので、今でも続いているかどうか分からない。統計をみると今でも、区内からかなりの牛蒡が出荷されているので、違った形態でこの牛蒡屋が存在するのかもしれない。区内には現在牛蒡の作付けは殆んど見られない。これは作付け統計でなく、出荷統計の資料である。

この「中の宮牛蒡」を改良したのは、この地に住んでいた「鹿島安太郎」であるが、この人は、練馬大根で名を知られたので、牛蒡の方はあまり、日立たず人にも知られていないのは残念である。園芸学の分類から見ると、滝野川品種群一品種滝野川とならんで、中の宮として、記録されているが、中の宮が練馬区春日町であるということは、知らない人の方が多い。野菜専攻の学者の中にも、中の宮が何処だか分からず「もと東京府中の宮原産である」と苦しまぎれに漠然として記録している。東京府になった時は、中の宮は上練馬村の字（あぎ）になっているから、村の名前をいくら探しても発見できない。中の宮は、江戸時代には「中の宮村」と称し、享保（一七一六～一七三五）の石塔にきちんと刻まれている。中の宮の語源は不詳である。

今（平成二年秋）都営地下鉄の工事が進んでいるので、私は工事現場を覗いてみたが、赤土の「関東ローム」は驚くほど深く、中の宮では掘り出す土は、全て赤土なので、「成るほど、成るほど」関心した次第である。

聞くところによると五メートル以上はあるということである。やはり練馬あたりは、牛蒡、大根、長人参の、江戸から東京の大産地であった条件は備えていたわけである。

この牛蒡は、わが国原産ではない。大根、人参と同じくシルクロードをとおって、遙々伝来した野菜である。面白いことに牛蒡を食べる民族はわが国だけで、中国でも食べない、最もこうした野菜の伝来の始めは、種子が薬草としてで、それがいつの間にか本体も野菜として食べられるようになったのである。多分薬草なら食べられるし、きっと体に良いと言う素朴な感覚だったと、私は推定している。牛蒡に関する悲しい話は、かの昭和の大戦のとき、米英軍の捕虜に牛蒡を食べさせたところ、戦後「捕虜虐待」として戦犯になり、通訳が牛蒡を「Root」即ち木、草などの根と訳したので「とんでもない奴」と有罪になった実際の話がある。英名は「Great burdock」と正確な名前があるのだが、園芸学を知らない通訳ではこんな悲劇がおこるのである。それに米英では牛蒡を野菜として食べる習慣がない。私自身通訳を介して野菜の話をも米人の技術者としたことがあるが、専門語については直接の方が、理解が早かった経験がある。何事も専門、専門であろう。

最近この牛蒡の消費がどんどん減って、世界でただ一つ牛蒡を食べる民族も無くなるかに見えたが、嬉しいことにあのハンバーグ店で新しい趣向として「きんぴら牛蒡」をふんだんに入れた新しいハンバーグを売り出したと広告にあった。牛蒡が見直しされてきたらしいのは、嬉しい社会現象である。機会をみて「きんぴら牛蒡」や「柳川鍋」などの牛蒡について述べてみたい(本会委員)

注記 本来ならば野菜の名前はカタカナで記すことに、園芸学会ではきめられているが、ここでは慣用している漢字を使った。人称についてもすべて敬語を便宜上省いたが、これも慣用に従ったまでである。